

1 非等速円運動，複数物体系の力学，束縛条件，動く座標系

【メモ】

・問1は力積の計算．入試では、「力積」と出てきて初めて力積を考えればよい．力積の計算方法は次の通りに分類される．

$$\left\{ \begin{array}{l} f \text{ の関数形が既知} \rightarrow \text{定義通りの計算（積分，もしくは } f-t \text{ 図の面積評価）} \\ f \text{ の関数形が不明} \rightarrow \text{運動量収支から逆算} \end{array} \right.$$

・問4は非等速円運動の問題．非等速円運動は，以下の2式を連立する*1*2．

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{運動方程式（中心成分）} \leftarrow v \text{ を決定した後，拘束力の決定} \\ \text{力学的エネルギー保存則} \leftarrow v \text{ の決定} \end{array} \right.$$

・問5，問6は複数物体系の運動．複数物体系の運動は，

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{外力のない方向の運動量保存則} \\ \text{力学的エネルギー保存則} \\ \text{（束縛条件）} \end{array} \right.$$

を連立して解くことが基本となる．本問は束縛条件まで考える必要のある問題であり，このタイプは，受験生としては（束縛条件が見抜けないことで）手が付かないことが多く，計算も煩雑になるので，基本的に試験時間内で処理するのは難しい．方針はわかっているとしても，試験場では「捨て問」としてしまうのが賢明である（立式だけして部分点をもらう問題）*3．

【解答】

問1 力学的エネルギー保存則より，台の水平面での速さは，

$$\frac{1}{2}mv^2 = mgh, \quad \therefore v = \sqrt{2gh}.$$

よって，運動量変化より，

$$\vec{I} = \Delta\vec{p} = \left(\begin{array}{c} m\sqrt{2gh} \\ 0 \end{array} \right).$$

問2 運動方程式は，

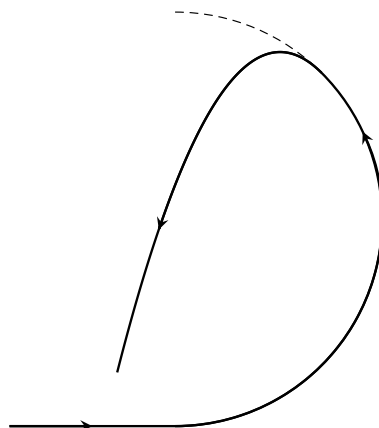
$$\left\{ \begin{array}{l} \underline{ma_x = -N \sin \phi}, \\ \underline{ma_y = N \cos \phi - mg}. \end{array} \right.$$

*1 等速円運動は，運動方程式（中心成分）と必要に応じて各種つりあいを立てる．

*2 単振り子やペーパートロンなどでは，力学的エネルギー保存則ではなく，それと数学的には同値な接線方向の運動方程式を考える．

*3 だからこそ解ききったらかっこいい．

問3 円筒面上の点から離れてからは重力のみを受けて運動するので、放物軌道に移る（以下の図）。



問4 Q を通過することから、 $\phi = \pi$ で $N \geq 0$ を満たす。運動方程式（中心成分）より、

$$\begin{aligned} m \frac{v^2}{r} &= N + mg \\ N &= m \frac{v^2}{r} - mg \geq 0, \quad \therefore v \geq \sqrt{gr}. \end{aligned}$$

よって、Q を通過する場合、通過時の最小の速さは \sqrt{gr} であり*4、このとき、小球の位置は

$$\begin{cases} y = 2r - \frac{1}{2}gt^2, \\ x = -\sqrt{gr}t, \end{cases}$$

と表され、 $y = 0$ を解いて、

$$t = \sqrt{\frac{4r}{g}}, \quad \therefore |x| = \left| -\sqrt{gr} \sqrt{\frac{4r}{g}} \right| = 2r.$$

問5 2物体（と重力場）を合わせて1つの系と見る。小球に関する物理量は小文字、台に関する物理量は大文字で記す。 x 方向の運動量保存則、力学的エネルギー保存則、および束縛条件はそれぞれ、

$$\begin{cases} mv_x + MV = m\sqrt{2gh}, \\ \frac{1}{2}m(v_x^2 + v_y^2) + \frac{1}{2}MV^2 + mgr(1 - \cos \phi) = mgh, \\ v_x - V = r\dot{\phi} \cos \phi, \\ v_y - 0 = r\dot{\phi} \sin \phi. \end{cases}$$

また、台の運動方程式、および台に対する小球の運動方程式（中心成分）は、

$$\begin{cases} MA = N \sin \phi, \\ m \frac{(v_x - V)^2 + v_y^2}{r} = N - mg \cos \phi + mA \sin \phi. \end{cases}$$

*4 力学的エネルギー保存則より、Q を通過する瞬間の速さは $\sqrt{2g(h-2r)}$ と求まり、これが \sqrt{gr} と等しいときを考えることで、Q を通過するために最小な高さ h が $\frac{5}{2}r$ と求めることもできる。

$\phi = \frac{\pi}{2}$ では、束縛条件より $v_x = V$ であり、運動量保存則より、

$$v_x = V = \frac{m}{M+m} \sqrt{2gh}.$$

よって、力学的エネルギー保存則より、

$$\frac{1}{2}(M+m) \left(\frac{m}{M+m} \sqrt{2gh} \right)^2 + \frac{1}{2}mv_y^2 + mgr = mgh$$

$$\therefore v_y = \sqrt{2mg \left(\frac{M}{M+m} h - r \right)}$$

と求まり、また、台の運動方程式より $A = \frac{N}{M}$ である。以上より、台に対する小球の運動方程式（中心成分）から*5、

$$N + \frac{m}{M}N = m \frac{v_y^2}{r}, \quad \therefore N = \frac{2Mmg}{M+m} \left(\frac{M}{M+m} \frac{h}{r} \right).$$

問6 $\theta = \pi$ で $N \geq 0$ を満たせばよい。このとき、束縛条件より $v_y = 0$ であり、運動量保存則、および力学的エネルギー保存則より、

$$\begin{cases} mv_x + MV = m\sqrt{2gh}, \\ \frac{1}{2}m(v_x^2 + v_y^2) + \frac{1}{2}MV^2 + mgr(1 - \cos \phi) = mgh, \end{cases}$$

$$\therefore v_x = \frac{M}{M+m} \left[\frac{m}{M} \sqrt{2gh} - \sqrt{\frac{m}{M} 2gh - 2 \left(1 + \frac{m}{M}\right) g \left\{ 2r - \left(1 - \frac{m}{M}\right) h \right\}} \right],$$

と求まり*6、相対速度の大きさは、

$$\begin{aligned} (v_x - V)^2 + v_y^2 &= \left\{ \left(1 + \frac{m}{M}\right) v_x - \frac{m}{M} \sqrt{2gh} \right\}^2 \\ &= \frac{m}{M} 2gh - 2 \left(1 + \frac{m}{M}\right) g \left\{ 2r - \left(1 - \frac{m}{M}\right) h \right\}. \end{aligned}$$

よって、台に対する小球の運動方程式（中心成分）より、

$$N = \frac{m}{r} \left[\frac{m}{M} 2gh - 2 \left(1 + \frac{m}{M}\right) g \left\{ 2r - \left(1 - \frac{m}{M}\right) h \right\} \right] - mg \geq 0$$

$$\therefore h \geq \frac{r}{2} \left(5 + 4 \frac{m}{M} \right).$$

*5 問題文では、「垂直抗力の大きさ」とは言われていないので、

$$\vec{N} = \begin{pmatrix} -\sqrt{2gr} \left(\frac{M}{M+m} \frac{h}{r} - 1 \right) \\ 0 \end{pmatrix}$$

と答えた方が良いかもしれない。問2の問題文にある「垂直抗力を N 」という文は「垂直抗力の大きさを N 」とするのが適切な表現であり、ここで聞いているのは N の値、すなわち垂直抗力の大きさであるところから勝手に解釈をして、あえて大きさを解答に記した。

*6 $v_x - V < 0$ より、根号の符号がマイナスと定まる（回転角 ϕ は常に増加していることから $\dot{\phi} > 0$ であり、 r もまた正であるから）。

2 電磁誘導－ vBl 公式，運動の時間追跡

【メモ】

- ・ vBl 公式を用いる（回路の一部・全体が磁場中を運動する）電磁誘導の問題．
- ・ 回路の状態（回路を流れる電流 I ，コンデンサに蓄えられる電荷 Q の）決定は，

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{キルヒホッフ則} \\ \text{電荷保存則} \\ \text{素子の性質} \end{array} \right.$$

によって行う．

- ・ 電磁誘導の問題は，基本的には以下の流れで構成される．

- ① 誘導起電力の決定
- ② 回路の議論
- ③ 運動の議論
- ④ エネルギーの議論

なお，今回はエネルギーに関する設問は設けられていない．

【解答】

問1 vBl 公式より，

$$V = vBl, \quad (\underline{Q \text{ の方が高電位}}).$$

また，キルヒホッフ則より，

$$vBl - \frac{q}{C} = 0, \quad \therefore q = \underline{CvBl}.$$

問2 公式より，

$$F = -IBl = -\frac{\Delta q}{\Delta t} Bl = -C \frac{\Delta v}{\Delta t} (Bl)^2 = \underline{-C(Bl)^2 a}.$$

問3 運動方程式より，

$$ma = -kx - C(Bl)^2 a, \quad \therefore a = \frac{k}{m + C(Bl)^2} x.$$

よって，ばねに押されている区間では振動中心 $x = 0$ ，角振動数 $\omega = \sqrt{\frac{k}{m + C(Bl)^2}}$ の単振動を行う．初期条件より，導体棒の位置，および速度は時刻 t の関数として，

$$\left\{ \begin{array}{l} x = -d \cos(\omega t), \\ v = d\omega \sin(\omega t), \end{array} \right.$$

と表される. $x = 0$ を解いて,

$$t = \frac{\pi}{2} \sqrt{\frac{m + C(B\ell)^2}{k}}, \quad v = d \sqrt{\frac{k}{m + C(B\ell)^2}}.$$

問4 キルヒホッフ則より,

$$\begin{cases} vB\ell - RI_R = 0, \\ vB\ell - \frac{q}{C} = 0, \end{cases} \quad \therefore I_R = \frac{vB\ell}{R}, \quad I_C = \frac{\Delta q}{\Delta t} = CB\ell \frac{\Delta v}{\Delta t} = CB\ell a.$$

よって, 公式より,

$$F = -(I_R + I_C)B\ell = -\frac{(B\ell)^2}{R}v - C(B\ell)^2 a.$$

問5 運動方程式より,

$$\begin{aligned} m \frac{\Delta v}{\Delta t} &= -\frac{(B\ell)^2}{R} \frac{\Delta x}{\Delta t} - C(B\ell)^2 \frac{\Delta v}{\Delta t} \\ \{m + C(B\ell)^2\} \Delta v &= -\frac{(B\ell)^2}{R} \Delta x, \quad \therefore \alpha = -\frac{R}{(B\ell)^2} \{m + C(B\ell)^2\}. \end{aligned}$$

問6 問5より,

$$\begin{aligned} x - 0 &= -\frac{R}{(B\ell)^2} \{m + C(B\ell)^2\} \left(0 - d \sqrt{\frac{k}{m + C(B\ell)^2}} \right) \\ \therefore x &= \frac{Rd}{(B\ell)^2} \sqrt{k \{m + C(B\ell)^2\}}. \end{aligned}$$

【補足1】問5の時間追跡

運動方程式より,

$$\begin{aligned} \frac{dv}{dt} &= \frac{1}{\alpha} v \\ \int_0^t \frac{1}{v} \frac{dv}{dt} dt &= \int_0^t \frac{1}{\alpha} dt \\ \log \frac{v(t)}{v(0)} &= \frac{1}{\alpha} t \\ \therefore v(t) &= v(0) e^{\frac{1}{\alpha} t}. \end{aligned}$$

さらに t で積分して,

$$\begin{aligned} \int_0^t \frac{dx}{dt} dt &= \int_0^t v(0) e^{\frac{1}{\alpha} t} dt \\ \therefore x(t) - x(0) &= \alpha v(0) \left(e^{\frac{1}{\alpha} t} - 1 \right) \end{aligned}$$

ここに $x(0) = 0$, $v(0) = d\sqrt{\frac{k}{m + C(B\ell)^2}}$ を代入し, $t \rightarrow \infty$ とすれば当然同様の結果を得る. なお, 空気抵抗型の微分方程式に従う運動ゆえ, エネルギー的な解法は選択できない.

【補足2】ジュール熱の計算

系のエネルギー収支は, 運動方程式, およびキルヒホッフ則より,

$$\begin{cases} mv \frac{dv}{dt} = -(I_R + I_C)B\ell v, \\ RI_R^2 = vB\ell I_R, \\ \frac{q}{C}I_C = vB\ell I_C, \end{cases} \quad \therefore \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2}mv^2 + \frac{1}{2}\frac{Q^2}{C} \right) + RI_R^2 = 0.$$

よって, 導体棒が止まるまでに抵抗で生じたジュール熱は,

$$J = -\Delta K - \Delta U = \frac{1}{2}(C B \ell)^2 v^2 + \frac{1}{2}mv^2 = \frac{1}{2}kd^2.$$

なお, 【補足1】から,

$$I(t) = \frac{B\ell}{R}v(0)e^{-\frac{1}{2}\alpha t}$$

であり, ジュール熱の定義より,

$$J = \int_0^\infty \frac{\{B\ell v(0)\}^2}{R} e^{-\frac{1}{2}\alpha t} dt = -\frac{\alpha}{2} \frac{\{B\ell v(0)\}^2}{R} = \frac{1}{2}kd^2.$$

3 微小変化の計算, 分子運動論

【メモ】

- ・熱力学で用いる基本的な公式は, 状態方程式*7, 熱力学第1法則*8, 内部エネルギーの公式, ポアソンの公式*9しかない*10. 論理としては, どれか3つを仮定すれば残りの1つが導けるようになっている.
- ・問1から問4は熱力学の問題. ポアソンの公式の導出と同様の計算手順を辿る.
- ・問5は分子運動論. 誘導がなく, 自分で全体の議論をしないといけない(これが難しいかもしれない). 分子運動論は, 一連の流れを身に付けておけばよい. 容器の形状は直方体, 球を押さえておく.

【解答】

問1 状態方程式は,

$$\begin{cases} pAL = kN_A T, \\ (p + \Delta p)A(L + \Delta x) = kN_A(T + \Delta T). \end{cases}$$

問2 公式より,

$$\Delta U = C_V \Delta T.$$

また, 熱力学第1法則より*11,

$$\Delta U + pA\Delta x = 0.$$

問3 ピストンのつりあいより,

$$\Delta F = pA - (p + \Delta p)A = -\Delta pA.$$

ここで問1(状態方程式), 問2(熱力学第1法則)より,

$$\begin{cases} \Delta pAL + pA\Delta x = kN_A \Delta T, \\ C_V \Delta T + pA\Delta x = 0, \end{cases} \quad \therefore \Delta pA = -p \left(1 + \frac{kN_A}{C_V} \right) \frac{A}{L} \Delta x.$$

*7 圧力は可動部分のつりあい, 体積は容器の容積, モル数が与えられたときに温度を決める式, という認識が基本.

*8 内部エネルギー変化は公式, 仕事は $p - V$ 図の面積, 熱量は熱力学第1法則を介して間接的に計算される.

*9 ゆっくりとした断熱過程において用いる式. ポアソンの公式から圧力または体積が求まり, 状態方程式によって温度が求まる. なお, この断熱過程では熱力学第1法則が仕事の決定式となる.

*10 熱効率の定義式, 比熱の定義式は一旦置いて.

*11 ピストンのつりあいより圧力は $pA - \Delta F$ であり, この微小変化の間に気体がした仕事は,

$$W = (pA - \Delta F)\Delta V \doteq pA\Delta V.$$

よって,

$$\Delta F = p \left(1 + \frac{kN_A}{C_V} \right) \frac{A}{L} \Delta x, \quad \therefore B = p \left(1 + \frac{kN_A}{C_V} \right).$$

問4 長さの次元を L, 質量の次元を M, 時間の次元を T とすると, B, および ρ の次元はそれぞれ,

$$[B] = \text{ML}^{-1}\text{T}^{-2}, \quad [\rho] = \text{ML}^{-3}.$$

よって,

$$\alpha = \frac{1}{2}, \quad \beta = -\frac{1}{2}.$$

問5 Δt 間に単原子分子がピストンに与える力積は,

$$\sum_{i=1}^N 2mv_{i,x} \frac{v_{i,x}}{2L} \Delta t = \frac{m}{L} \sum_{i=1}^N (v_{i,x})^2 \Delta t = \frac{mN\overline{v_x^2}}{L} \Delta t = \frac{mN\overline{v^2}}{3L} \Delta t.$$

これが気体の与える力積と同一視して,

$$pAL\Delta t = \frac{mN\overline{v^2}}{3L} \Delta t, \quad \therefore p = \frac{1}{3}\overline{\rho v^2}.$$

問6 問4 より $s = \sqrt{\frac{B}{\rho}}$, 問5 より $\sqrt{\rho} = \sqrt{\frac{3p}{v^2}}$ ゆえ,

$$s = \sqrt{\frac{B\overline{v^2}}{3p}} = \sqrt{\frac{1}{3} \left(1 + \frac{kN_A}{3kN_A/2} \right) \overline{v^2}} = \frac{\sqrt{5}}{3} \sqrt{\overline{v^2}}, \quad \therefore D = \frac{\sqrt{5}}{3}.$$